

特別対談

経団連総合政策研究所

テクノロジーと 希望が拓く 理想の未来



オリイ研究所 共同創業者
代表取締役所長 CVO

吉藤健太郎

(吉藤オリイ)

中島 隆博

経団連総合政策研究所 研究主幹
東京大学東洋文化研究所 所長

はじめに

経団連総合政策研究所（旧・21世紀政策研究所）では、2021年に資本主義・民主主義研究プロジェクト（研究主幹・中島隆博東京大学東洋文化研究所所長）を立ち上げ、哲学をはじめとするリベラルアーツの叡智の蓄積を活用しつつ多面的に検討を深めるべく、国内外のさまざまな分野の有識者と議論を行ってきました。

近年、テクノロジーの発展が目覚ましく、かつては不可能であったことも可能になりつつあります。しかし、技術とは闇雲に発達しさえすればよいというものではないはずです。本プロジェクトでは、テクノロジーとはどのように使われるべきで、どうすれば人間の幸せに結びつくのかを模索すべく、今回の対談を行うことといたしました。オリイ研究所とは、孤独の解消をミッションに掲げ、遠隔操作可能な分身ロボット *Orilime*

を開発して、コミュニケーションテクノロジーによる新たな社会参加の実現を目指す研究所です。今回の対談では、同研究所の吉藤オリイ所長と中島研究主幹との対話を通して、テクノロジーが変えていく未来の姿について具体的に考えます。

経団連総合政策研究所

※肩書は収録時のものです。

特別対談

テクノロジーと希望が拓く理想の未来

分身ロボットカフェについて

中島 オリイさんは、日本橋で障害者の方が働くカフェを運営されているんですね。

前々から興味はあったんですが、なかなか機会がありませんでした。今日はよろしくお願ひします。

オリイ よろしくお願ひします。私が代表取締役所長を務めるオリイ研究所は、「分身ロボットカフェ DAWN ver.β」を運営しています。障害者だけでなく、さまざまな理由で外出困難な方が、分身ロボット「Oriime」を遠隔操作してサービスを提供するカフェです。A-ロボットと思う方もいますが、それぞれパイロットと呼ばれる生身の人 がいて遠隔で操作しています。

中島 今日は、Oriimeのパイロットとして、マサさん（永廣 証人さん）が参加されています。マサさん、よろしくお願ひします。

マサ よろしくお願ひします。オリイさんの秘書をしております、永廣と申します。今



分身ロボット「OriHime」

日は自宅から遠隔で参加しています。

中島 マサさんのご病気について伺ってもいいですか？

マサ 僕は、SMA1型^(註1)という、だんだん筋力が弱っていく進行性の病気です。

ALS^(註2)に似ていますが、進行はもっと遅いです。今もそうですが、視線入力装置プラス、口元と手元にあるスイッチでパソコンを操作しています。

中島 オリイ研究所に入られたきっかけは何だったんですか？

マサ 2018年に分身ロボットカフェの実証実験が行われたんですが、そこに参加したのが最初です。その頃、僕は

(註1) 脊髄性筋萎縮症 (SMA) のうち最重症型。筋肉を動かす運動神経 (運動ニューロン) の機能障害により、乳児期早期から全身の筋力低下や呼吸機能の障害が現れる遺伝性疾患。

(註2) 筋萎縮性側索硬化症。脳および脊髄の運動ニューロンが徐々に障害され、四肢や発話・嚥下・呼吸に関わる筋力が進行性に低下する神経疾患。SMA と異なり、多くは非遺伝性。

学を中退して就活を始めていたんですが、当時は今ほどリモートワークが整備されておらず困っていたところで、オリイさんのSNSでOnlineのパイロットを募集しているのを見つけました。それまでネガティブ思考で、寝たきりでは何もできないと思いがちだったんですけど、なんだかその募集から目が離せなくなって、別に死ぬわけでもないし、応募して挫折したっていいかと思って、一步踏み出しました。

中島 初めて働かれたときはどうでしたか？

マサ それまでアルバイトの経験もなかったし、家族やヘルパーさん以外と話す機会もほとんどありませんでした。だから、どんな話をすればいいかわからないし、空気を読めずに変な話をしてしまうこともありました。でも、お客さまも同僚もみんなすごく温かくて、なんとか7年続けてきました。今では多少しゃべれるようになりましたし、自信もついて、寝たきりでもこうして働けるし、社会の役に立ると気づきました。

中島 それは素晴らしいことですね。Onlineに出会って人生が変わったという方もたくさんいらっしゃるんじゃないですか？

オリイ 今まで150人くらいに働いてもらいましたが、企業への就職を決めている方



マサ（永廣 柁人）さん

分身ロボット「OriHime」のパイロット。
吉藤オリィの秘書。
脊髄性筋萎縮症（SMA）により寝たきり。
パソコンを操作し、イラストを描く、仲間とゲームを作るなどの活動を積極的に行っている。最近思うこと、「人生が足りない！」。

もいます。初めは1日1時間ほどしか働けなくても、だんだん時間を延ばしていけるようになるのです。週に20時間を超えると企業の採用枠に入るので、そこが一つの目安です^(註)ね。

中島 マサさんは、オリイさんとあちこちで講演されたりしているようですが、他にもアクティブに活動されている方はいらっしゃるんですか？

オリイ たくさんいますよ。パリ・パラリンピックの銀メダリストの方とか。他には、ALS患者でDJをしている方もいるし、他にもアパレルをやったり作曲をしたりインフルエンサーをしたり。たくさんいすぎて、パツと言えないくらいです。

中島 すごいですね。カフェで短く働きながらリハビリ、というようなイメージとは全然違いますね。回復ではなくて、能力・潜在力のようなものが生まれている感じがします。

オリイ 挑戦することによって、できることが拡張されていくという感じの方がイメージとしては近いですね。これまで、もうできないと諦めていたことが、テクノ

(註3) 脊障害者雇用促進法において、週所定労働時間が20時間未満の障害者は、障害者の実雇用率(各事業主における、全従業員の中の障害者の割合)算定の対象となる労働者に含まれないとされていた。令和4年の同法改正によって、週所定労働時間が10時間以上20時間未満の重度身体障害者、重度知的障害者、精神障害者は、1人につき、実雇用率上0.5人と算定することとされた。

ロジィの力で「実はできる」と変わった瞬間に、すごく人生を前向きに捉えることができるようになります。

テクノロジィの進化により何が変わるのか？

オリィ Yさんという女の子がいます。先天性ミオパチー^(註4)という難病で、手足を動かすこともしゃべることもできなくて、周りからは何も理解していないと思われていました。でも、5歳のときに、ストレッチャーを視線入力装置で動かせるようにしてあげたら、すぐに使い方を覚えて、生まれて初めてお母さんを追いかけたんですよ。

彼女の目には明らかに強い意志がありました。それを、視線入力装置によって走り回るといふ動きに「見える化」してあげる。そうすると何が変わったと思いますか？ 周りからの扱われ方が変わりました。彼女にもっといい教育を与えよう、Orimeも買えばいいとあって、Orimeで学校に通ったり、さまざまなイベントに参加したりできるようになりました。彼女はその後、宇宙に夢中になり、8歳でPowerPointに合

(註4) 生まれつき筋肉に構造的・機能的な異常があることによって起こる遺伝性筋疾患の総称。乳児期から筋力低下などがみられ、運動発達の遅れを伴うことが多い。

成音声を埋め込んで、分身ロボットカフェで宇宙の解説イベントを開き、中学1年生で、天文宇宙検定という大学生が解くような問題が出る試験に合格しました。将来はOrilimeで宇宙飛行士になりたいと言って、JAXAに呼ばれたりもしています。

中島 本当にすごいことですね。

オリイ 周りからの扱われ方が変わるといのはとても大事なことです。その結果として、人生が変わっていきます。こんなふう動きを拡張することができるものを、私は「リアクシヨン増幅器」と呼んでいます。わずかな動きを増幅してあげると、相手からのリアクシヨンも大きくなります。音楽にノることができる機械、じゃんけんができる機械、焼き肉を焼けるロボットアーム、いろいろつくりました。何も最先端のテクノロジーでなくてもいいんです。ごく簡単な機械でいい。

じゃんけんの機械は大人気でした。自分でじゃんけんができないから、給食のおかずのおかわりをもらう争いに参加できない。代わりにヘルパーさんが参加して、それで負けられたんじゃ納得がいかない。だから自分でじゃんけんができる機械がほしい。与えられた人生ではなく、自分で選んだ人生であることが、結果への納得感を生みます。



吉藤健太郎（吉藤オリィ）代表取締役所長 CVO

中島 オリィさんは、いろんな方の「これがしたいんだ」という望みを実現しているんですね。オリィ 山に登れない人がいたとして、登りたいたいという強い望みがなければ、実はあまり障害になりません。できないことがあって、「他の人はできているのに」「俺もやってみよう」という欲望が湧いてくる。欲を持てることは価値なんです。どこかに行きたいと思えるから、階段ではなくスロープがあつてほしかったりするでしょう。

私は、大事なものは何ができるかではなく、何をしようとするかだと思います。つまり、今、何ができないかということです。私は、「できないこと」こそが価値になると思っています。

中島 テクノロジというのは、望む力を実現する、希望を実現するものですよね。望まなければ出番なんかない。単にできなさをできるようにする道具というだけではないんですよね。

ある友人が、「可欲性」という言葉を使っていました。欲する力です。単なるできるできないを超えて、望みを持てるかということです。これは響きました。

オリイ なるほど。いいですね。諦めなくていいわけです。

中島 マサさんはこれから何かチャレンジしたいことはあるんですか？

マサ 勉強がしたいです。大学は中退してしまいましたが、大人になって働いてから、改めてきちんと学びたいと思って、放送大学に入り直しました。面白そうだと思ったものをかいつまんで勉強中です。

中島 いずれは卒論を書いたりもするんですか？

マサ 卒論は選べるんで、どうしようかなと思っています。とりあえず目の前の課題をこなしつつ、3、4年くらいで卒業を目指しています。

オリイ マサのように7年間ロボットを操り続けて、仕事もしながら生きてる人類って

他にいないよ。世界初だと思うから、マサにはいろいろな論文を書いてほしいね。

マサ 論文は頭が痛くて……（笑）。

中島 誰もしたことがない経験をしているんだから、まとめるだけで論文になりますよ。

「できなさ」と関係性の価値

中島 「できなさ」の価値について、詳しくお伺いしたいです。

オリイ 例えば、われわれのパイロットには、英語が苦手な人、人前で話すことが苦手な人、しゃべることができない人もいます。ではどうすればそれをカバーできるだろうと考えます。しゃべることができなくても、視線入力装置で文字を打てますよね。そういう接客があったっていい。お客さまが喜んでくれたらそれが正解なんです。逆に、もともとCAやホテルマンとしてバリバリ働いていた方もいますが、そういう方がうまい接客をすればするほど、みんなに無視されてしまう。あまりにできすぎると、録音やA Iだと思われるしまうのです。

中島 それだと味が無い、価値がないわけですね。「できなさ」というのが案外大事なスパイスで、それが個性・パーソナリティーをつくって、そこに皆さんが注目してくれる。

マーサ・ヌスバウムのケイパビリティという概念(註5)がありますよね。あれはやはり、「できる」ということをベースにした概念だと思っんです。でも、お話を伺っている、単にできるというのではなくて、その人がその人であるということがパーソナリティーに直結しているような気がするんですね。なかなか動けない方が働くというのはもちろんすごいことなんです、それだけではなくて、その人がその人であることが価値になるような、そういう受け止め方をしました。

オリイ できないからこそ、その人を応援したくなったり、自分のできることでサポートしたくなったりしますよね。あるいは、「大丈夫、僕もできないから」と言ったりして、とても人間くさい関係性が生まれます。

私は、分身ロボットカフェのパイロット第1条に「ロボットになるな」という言葉を入れました。パイロットの価値は、オーダーを取ることでも配膳することでもない。

(註5) アメリカの哲学者・倫理学者マーサ・ヌスバウム(1947-)が展開した規範的枠組み。人の豊かさや社会の公正さを、所得や資源の量ではなく、人々が「実際に何ができ、どのような生活を営むことが可能か」という実質的な選択の自由(能力)によって評価すべきだとする考え方。



中島研究主幹

それだったらAIでいい。その人がいるからカフェに行く、そういった関係が大事なのです。分身ロボットカフェのGoogleレビューを見ると、「○○さんの人生が聞けて良かった」など、バイネームの感想がたくさん来ます。個人名がたくさん出てくるのです。マサにも、マサに会いたいから来るといふ人がいます。

中島 マサさんのファンがいるんですか？

マサ います。初期からほぼ毎日通ってくださる常連さんもありますよ。

中島 毎日？ それはすごい。

オライ お客様さまから、「マサくん、次のシフトいつ？」と聞かれることがあって、「もはやこれはカフェではないのでは？」と思うことが

ありました。そこで、まだ実験段階ですが、夜たまたに常連さんを招いて「スナックマサ」をやるなどの試みを行っています。

中島 あそこに、「スナック織姫」って看板がありますね。カフェの中なのに（笑）。
オリイ そうです。あえて、どピンクな看板にしました（笑）。

現在、ロボットが肉体労働を代替し、Aーが頭脳労働を代替しつつありますよね。その中で、私はこの場所を、「ではわれわれ人間の仕事は一体何が残るのか」ということを研究する場にしており、その答えの一つが、スナックだと思っています。私は、「関係性労働」という言葉を使っています。

中島 関係性労働。それは面白い。

オリイ 髪を切るならこの人にやってほしい、あの人の淹れたコーヒーが飲みたい、そういう希望がありますよね。スナックも、お酒が目的ではなくて、ママに会いたくてお店に行くわけです。

中島 関係性労働のハブになる、ある種のパーソナリティーがいるわけですね。Aーでは代替できないようなパーソナリティー。スナックのママが典型ですし、ここではマサ

さんもそうですね。

オリー 今後はおそらく、この関係性労働というものが残っていくと思っています。友達みたいに、その人と一緒にいることが目的で、いるだけで目的は達成されているという状態です。その一歩手前には、何かを一緒にやるのが楽しいという段階があって、そのもつと前に、新しい発見や驚き、個人の知的欲求が満たされて楽しいという段階がある。

私たちはこのカフェで、一人ひとりの個性をできる限り前に出していったって、お客さまに喜ばれるような自分の強みを探して、プログラムを作っています。そうやって、A にも奪われない、その人の価値とは何かを深掘りしていく。目指すところは、他者との関係性を深めることを助けてくれるような A やテクノロジーズです。私たちは「リレーシヨントック」という言葉を使っています。つまり、関係性を補佐するコミュニケーションシヨンの福祉機器ですね。脚力の福祉機器は車いすであり、視力の福祉機器は眼鏡ですよ。でも、コミュニケーションシヨンの福祉機器はまだない。

中島 そのときの関係性は、無味無臭ではなく、いろいろな匂いや味が入り込んだもの

になりますね。

オリイ それから、人と人には相性がありますよね。本当は、相性もテクノロジで突破できないかと考えています。

中島 それは面白い。相性って本当にありますよね。あれは何なんでしょう。

オリイ なんとなく自分とは合わない人もいれば、逆に一緒にいるだけで楽しい友達もいます。その原因を説明することがいいのかはさておき、うまくリレーションテックで解決できないかとは思っています。

中島 どうやってやるんでしょう？

オリイ 例えば、先ほどのリアクション増幅器を使うことでスナックの心地よい空間はある程度演出可能なのではないかなと思っています。

Onlineというロボットを使うと、われわれはまず生身の体から外れます。ベネツィア・カーニバルみたいに、立場やビジュアルから解放されたアノニマス（匿名の人）として会うことによって、心地よい関係性をつくることができるかもしれない。オンラインゲーム上だと仲良しだったのに、リアルでオフ会をしたばかりに、オンライン上で

も会えなくなってしまうことはある。その逆です。

心地よい関係や相性は、普遍的でも絶対的でもなく、出会い方や、自分がどのような姿で、どのような状態で存在しているかによって、変えていけるのではないかなと、そう思います。

中島 なるほど。Onlineは仮面にも見えませぬ。

オリイ これは能面を参考にデザインしました。人は見た目が9割と言われることもありますが、私は9割を見た目に占められてたまるかと思っています。オンラインゲームは、その第一印象から解放されているところもいいところだと思っています。

Onlineのパイロットは各テーブルで30〜40分接客をしますが、生身の人がそんなに長くテーブルにいたら、お客さんは「もういいですよ」となると思うのです。居酒屋の店員さんはそんなに長くいませんよね。

中島 確かにそうですね。

オリイ 私たちが受け止められる情報量には限度があると思います。生身の体は情報量が多い。よく、目を見て話せと言われますが、果たしてこの体は人と仲良くなることに

最適化されたデザインだろうか、と思うのです。私は脳と対話がしたいタイプの人間なので。このOnlineの姿で接すると、生身で会うよりもハードルを下げたコミュニケーションが取れると思います。距離というバリアも存在しているので、それもいいところですよ。普通、コンビニの店員さんにどこに住んでいるか聞いたら、捕まりそうですね。

中島 なかなかやばいですね。

オリイ でしょうか？ でも、分身ロボットカフェではみんなしゃべっています。

中島 Onlineを通すことで、生身では築けない親密な関係性をつくれているんですね。

目指すのは「孤独の解消」

中島 関係性というのは、一回繋がりだすと、連鎖的にどんどん繋がっていく可能性もありますよね。その先に何を見ていらっしやるんですか？

オリイ 私の研究テーマは「孤独の解消」です。友達がいても孤独を感じることはあり

ますよね。

中島 あります、あります。友達といればいるほど孤独だといるときもありますね。オリーさんは、そもそも孤独とはどういう状態だと考えていらっしやいますか？

オリー 私は、「誰からも必要とされていないということを自分で実感してしまう状態」だと思っています。主観ですね。孤立というのは状況なので客観視できるのですが。

中島 孤立と孤独は違うと？

オリー そうですね。孤独というのはあくまで主観で、自分が孤独と感じたら孤独だと思います。孤独は生きる気力を失わせる。ALSの患者さんは、だんだん体を動かすことができなくなつて、呼吸器を着ければ生きることができのですが、日本の患者の呼吸器装着率は3割くらいです。着けないとどうなるか。死んでしまう。

中島 なんで着けないんでしょう？ やはり絶望して？

オリー 絶望ですね。24時間介護が要るんですよ。家族の時間や未来を奪ってしまふ、社会のお荷物になってしまう。しゃべることも表情をつくることもできないし、ありがとうも言えない。何をするのも全部周りの人にやってもらう中で、生きることが自分で

許せなくなってしまうというのがALSの怖いところです。

でも、生きてやることを見つけれられた人、生きる理由を見つけれられた人は呼吸器を着けます。そうやって呼吸器を着けた方に何人かお会いしてインタビューをさせていただと、ほとんどの方は、生きる理由として、次世代に同じ苦しみを味わわせたくない、講演者として自分を見せることで病気について発信したいなどの理由を挙げます。誰かを助けるということの中に希望を見出していたんです。みんなの中に「人」がいたんですよ。自分以外の他者が存在していたのです。人って、他人や家族の迷惑になるくらいだったら死を選べるし、逆に誰かの役に立つのであれば生きることを選べるわけです。存在の価値をどうつくれるかが私のテーマなんです。

中島 オックスフォード大学のコリン・メイヤー教授という人が面白いことを言っています。彼は「help others to be able to help others（人を助けることのできる人を助ける）」ということが会社や社会の役割であると言っています。^{注6}本当にそのとおりだと思います。単に直接、人を助ければよいというわけではなくて、助けること自体を助けるという仕組みを社会が持たなければいけない場合があります。

(注6) コリン・メイヤー『資本主義再興——危機の解決策と新しいかたち』（宮島英昭監訳、清水真人・馬場晋一訳、日経BP社・2024）

今おっしゃったのも同じことですよ。ALS患者が「自分も人を助けているんだと思う」こと自体が生きる希望に繋がり、そして「ALS患者が人を助けているんだと思う」ことを、オリイ研究所がAーやロボットを使って助けているわけですよ。それが孤独の解消に繋がるんだと、とても腑に落ちました。

オリイ 人は本質的に誰かを助けたいのだと思います。誰かに必要とされたいんですよ。でも、今の社会は、誰もが他人を必要とせず生きていける世の中を実現しようという方向へ向かっているような気がします。

中島 自立した個人ということですね。

オリイ コロナ禍で、誰とも会わず、家から出なくても生きていける社会が実現されました。その中で、誰かに必要としてもらうことはとてもハードルの高いことになっていると思います。それが人を孤立させ、孤独にさせて、生きるハードルを上げているんだと思うのです。

私はできないことを積極的に人に明かしていきたいと思っています。やりたいけれどもできないことがあって、その障害をどう取り除くかについてみんなで力を合わせる、み

んなが役割を持てる、みんなが人を助けていける世の中を実現したいと思っ
ています。ひとりでもできて、AIと会話していればいいとい
うところの幸福感ではなく、ストレスもあるけれど、人どう繋がつて
いくかの先に、自分の生きる意味を見つけていける社会があると思っ
ているのです。だから私は、人間の価値は関係性であり、できないことは
価値になると考えています。

中島 ユヴァル・ノア・ハラリの「ホモ・デウス」の真逆(註7)ですね。

オリイ それは何ですか？

中島 神になるような人間、AIなどを使ってさまざまなことを支配で
きる人間のことですね。ハラリは、その対極として、useless class（無
用者階級）がいると言いました。マルクスが無産者階級と言ったでしよ
う。無産者階級は資産を持っていない、でも連帯できるわけですよ。連
帯して有産者を打倒することもできる。ところが、無用者は連帯すらで
きない。

(註7) ユヴァル・ノア・ハラリ「ホモ・デウス——テクノロジーとサビエンスの未来」(柴田裕之訳、河出書房新社・2018)。

ホモ・デウスとは、科学技術の発展により、かつては神の領域とされてきた力を人類が手にしつつある状態、あるいはその方向へ向かう人類像のこと。ハラリは、人類は現在、老化や死の克服(不死性)、脳や感情の操作による主観的幸福の最適化(幸福)、生物学的・認知的能力の飛躍的拡張(神性)といった目標を追求し始めていると指摘した。

その対極として、useless class(無用者階級)が生まれる可能性がある。無用者階級とは、AI等の発展によって労働市場や軍事・政治の意思決定から排除され、もはや搾取されることがなくなり、経済的にも政治的にも価値を持たない存在として扱われる人々である。マルクスの無産者階級と異なり、社会のシステムから切り離されることで共通の利害を持つことができず、連帯することもできない存在とされる。

オリイ 無縁者でもあるわけですか？

中島 そうです。無用者⇨無縁者。そういうディストピアをハハリは描いた。でも、それでは嫌だ、それでは将来の世代に社会を残せない、何か突破口はないかと多くの人が考えています。私は、今おっしゃったことがその大きなヒントになると思います。できなさというのが、より強い関係性・縁を生み出すという話ですね。

オリイ 無縁になる理由の一つは、外出できないがゆえに、見えにくくなってしまいうことだと思えます。車いす市場的には、東京では本来60人に1人くらいが車いすを持っているはずですが、そんなに見かけない。ストレッチャーや呼吸器を使っている人も全く見かけないですね。

マサは特別支援学校に通っていましたが、そこも今は、普通科の学校と分かれていきます。普通科に通う生徒にとっては、寝たきりの友達はいないということになる。支援学校がだめと言っているわけではなく、障害者に会ったことがなければ、どう接すればいいかもわからない。個人的には、女子に慣れてない男子校生のようなイメージです

(笑)。

中島 交ざるといふことが不十分なんですネ。

オリイ みんな、普通にそこにいるんですけどね。私は、そういう人たちと当たり前にすれ違える街をつくりたい。私たちだって、いつか寝たきりになりますしね。

中島 なります、なります。確実にあります。

オリイ そうなつたときにどうやって生きるのが自分らしいか、新しい出会いや発見をどう得るか、知的好奇心をどう満たすかなんてこと、誰も考えていない。マサたちは、単なる寝たきりの患者や障害者ではなくて、われわれの先輩なんですよ。マサは視線入力装置で文字だって書けますし、それで秘書検定とビジネス文書検定も取ってます。

マサ 以前は顎を使っていたましたが、目の方が早く動かせるので視線入力にしました。文字もイラストもできますよ。ビジネス文書検定の試験では手書きでビジネス文書を書かなきゃいけないので、手で書けないので、じゃあ目で書こうということになりました。

3時間くらいかかって、目がバッキバキになってその日はしんどかったですね。

オリイ 寝たきりでこの検定を取りに行ったのは、おそらくマサが初めてだと思います。中島 すごいですね。なるほど、マサさんは私たちの未来なわけですね。マサさんは、



オリイさんがおっしゃった関係性とか、孤独の解消について、どうお考えになっていますか？

マサ 僕は生まれてから一度も歩いたことがなくて、小学校は支援学級の障害者クラス、中学校も特別支援学校に行って、高校は定時制の都立の普通学校に行きました。Onlineと出会う前は、自分に自信がなくて、今ほど流暢にはしゃべれなかったんです。このまま寝たきりで将来はどうなるんだろうとか、漠然とした不安が大きかったです。でも、今はこうやってカフェでいろいろな方とお話しさせていただくことで、意外と寝たきりでもできることは多いんだというのが分かりました。ゲームを作ってコミケで売ったり、ロボットアームを使ってオムレツを作ってみたり。関係性が充実したおかげで、とても明るい考えを持てるように

なりました。オリイさんのリレーシオンテックというのは本当にあるんだと思います。

中島 オムレツ？　なんでまたオムレツなんですか？

マサ 同じ病気で寝たきりの女の子がいて、その子の将来の夢が料理人だということで、それを叶えるためのアームをつくろうということになったんです。めちゃめちゃ難しく、卵を何回も投げ飛ばしちゃって、人間の動きってすごいなって思いました。

オリイ　かなり塩コシヨウのきいた激辛の卵焼きを食べさせられましたね。

中島　面白いですね（笑）。

マサ　こういう体験を積み重ねて、本当にできないことってないんだなって思うようになりました。テクノロジーの進化で次はどんなことができるようになるのか、今はワクワクと楽しみがいっぱいで、人生が足りないんです。それくらい充実した毎日です。サイボーグが実現したら、200年とか長生きしたいです。

中島　人生を楽しみ尽くすには200年くらい必要ですか？

マサ　人類の滅亡まで見守りたいくらいです（笑）。

理想の未来とは？

オリイ 孤独を感じてしまうストレスサーは複数存在しているものだと思います。だからこそ、自分が誰かから必要とされるような、余裕や居場所がいくつかあることが大事だと思います。一つしか居場所がないと、嫌われてしまったらどうしようという恐怖で、自分らしさは出しにくい。それから、自分らしさという点については言えば、私は「ありがとう」は有限だと思ってるんですよ。

中島 どういう意味ですか？

オリイ 私は不登校だった時期があるんですけど、初めは親に対して「ありがとう」と言っていました。でも、そのうち、「ありがとうございます」と敬語になって、いつしか「すみません、いつも」になっていくわけです。

中島 だんだん負担になっていくわけですね。

オリイ 何かがなくなっていく感じがして苦しいんです。いつもすみません、私のせい

で申し訳ありません、私のことはもう結構です、ごめんなさい、となるわけです。お礼も言えない、謝ることも辛い、それで助けてくれた人が嫌な顔をするのも辛い、だからもう放っておいてください、となるのです。

中島 そうなったときにはもう自分らしさみたいなのはありませんね。

オリイ そうです。謝っているとき、お願いし続けているとき、自分らしさは消えていきます。尊厳も何もない。私に老後があるとして、そういう老後が待っていると思うと、生きることが辛くなります。

中島 それを避けるために、関係性というのはいくつか複雑にレイヤーとしてあった方がいいということですね。

オリイ そうですね。賛否ありますが、私は、オンラインゲームというのは心の逃げ場になりうると思っています。

中島 他の人と一緒にできるから、居場所になりますよね。

オリイ そうです。オンラインゲーム上にはAーではなく生身の人間がいて、社会があって役割がある。パーティーを組んで、自分が頑張らないと足を引っ張ってしまうから

頑張る。その結果、頼られて、友達ができて、自分を肯定できる。それ自体が一つの居場所になって、生きる理由にもなると思います。リアル肉の体にはアイデンティティはないけど、バーチャルの方に本当の自分がいるという状態は、心の逃げ場として有効だと思います。

中島 周りの人は心配しますけどね。

オライ バーチャルは実体としては見えませんからね。でも、例えばマサはリアルでは体を動かすことが難しくても、バーチャル上だと飛び跳ねたり家をつくったり、なんでもできるんですよ。何年前にメタバースが流行って、ゴーグルを着けてVR世界にダイブするという考え方がありましたが、引きこもっている方や障害者からしたら、普段はSNSやメタバースの住民で、リアル世界にダイブするためには逆にヘッドマウントディスプレイ（HMR、頭部装着ディスプレイ）が必要だということになるんです。私は、それこそがもう一つの体であるOnlineだと思っていますよ。

中島 私は、哲学というのは最初からメタバースみたいなものだと思うんですよ。障害のある方であろうがない方であろうが、哲学はできますよね。思考と言葉があればでき

ますし、ゲームに似た中毒性があります。あれこれ考え出すといろいろ分らないことが出てきて、壁に当たるじゃないですか。それを乗り越えるのは、ひとりではできませんですよ。仲間とやらないと哲学はできません。

私は最近よく、人の頭を使って考えた方がいいと言っています。自分の頭で考えられることはたかが知れています。三人寄れば文殊の知恵と言いますよね。

オリイ どうやって人の頭を使うのですか？

中島 やはり対話ですよ。人としやべっていると、普段自分が考えていないことが、わっと出てくる瞬間ってあるじゃないですか。あとは書くことですね。書くというのは人間にとって自然的な行為ではなくて、どこか反自然的な感じがするんですよね。書きたいことを書くというのはただの妄想の羅列です。書いた言葉が生き生きと動き、運動するようになるためには、洗練してあげないといけない。頭を使わないといけないわけです。そのときの頭というのは、自分の頭だけではなくて、昔の人や今の人は何を言っていたのかなとか、そういうものを考えながら書かないといけない。だから、哲学というのは常に共同作業なんですね。だから孤独ですが、孤立した行為ではない。

オリイ アカデミックであると。

中島 それが面白いと思っっているわけです。友人に平野啓一郎さんという作家がいるんですが、彼が分人主義^(註8)という言葉を使っています。あるとき、彼が私にメールをしてきて、individual (個人) からinを取ったdividualを表す日本語は何がいいですかねと聞くのです。divideするから分けているので、分人みたいな感じだと思っのですが、中国語でも通じますかねと問われ、大丈夫だと思っますと答えたんですよ。

オリイ それで分人という言葉が生まれたんですか。

中島 そうです。私は、individualな個性ではなくdividualな個性というあの考え方は、とても面白いと思っますね。

オリイ それは全く同感です。われわれがいつか寝たきり老人になつたとして、それ自体は否定できない事実で、病人で被介護者であつたとしても、それとは別にモニターを通したバーではマスターをやつていて、常連さんがいっぱいいて、一緒に談笑しながらみんなの仕事の話をしたり悩みを聞いたりしながらお酒を入れることができ、いろいろな人たちの人生を楽しむポジションにいるという未来は、私がつくれると思

(註8) 分人 (dividual) とは、個人 (individual) に代わる新しい人間のモデルとして、平野啓一郎により提唱された概念。分割することのできない「本当の自分」としての個人が存在するのではなく、対人関係ごと・環境ごとに分化した異なる人格の分人が存在すると思える。

っています。

中島 それは本当にわれわれが望んでいる未来ですよね。

希望の地平

中島 Aーやテクノロジーが進むと、「ホモ・デウス」のような人になりがちじゃないですか。でも、Aーやテクノロジーには別の使い方がありますよね。人を助けたいという人をサポートできるような、そういうテクノロジー。それが目指している社会は、究極的なデモクラシーという感じもするんですよ。われわれはどうしても民主主義を誤解していて、選挙でもすればいいという方法論に還元しがちですけど、そうではなくて、その社会にいるメンバーが価値を認め合って関係性を深め合うということが基盤ではないかという気もするんです。

オリイ 本来それが社会だったんです。

中島 それが社会ですよ。だから政治家などは、本当はそういうために働かなければ

いけないのに、どうも能力主義（メリトクラシー）を助長するような方向に行ってしまうっていると思います。

私は最近、能力主義の延長線上には未来がないと考えていて、「できること」とは違う地平とは何だろうと思うことがあるんですよ。

オリイ どういう点で、「できること」に未来がないと思われているんですか？

中島 結局、できるということを通じて過度に追求すると、できる人とできない人とですぐ差別が生じるじゃないですか。私も、「できなさ」というのが価値になると思うんですが、能力主義の人たちはできないということにとっても冷淡です。その先には、ハラリさんの言うような二極化したディストピアがやってくるに違いないと思って、本当にうんざりしているんですね。

できるとは違う人間のあり方って何だろうと考えて、私は「希望する」ということかなと思うんです。希望するというのは、できるとは違いますよね。

オリイ 違いますね。

中島 それから、「悟る」というのもありますよね。悟るということを通じて人間が自

己変容を遂げていく、これがとても大事だと思うんです。希望もそうですよね。今のあり方ではないあり方を欲するということから、できることは全く違う地平があつて、そこで自己が互いに変容する、そんな瞬間があるのではないかと。

さつき、カフェの感想で「人生が聞けて良かった」というものがあるというお話がありましたよね。それはとても intimate な（親密な）関係だと思つてますよ。例えばマサさんが接客をしたとして、お客さんとの間の親密な関係に価値があるのは、それがマサさんの人生を消費しているわけではないということですよ。

オリイ 消費ではないと思つてますね。

中島 全く違うと思つてます。お話を聞いて、いろいろ考えさせられたり、感じたり、相手の人生を受け入れて、それを糧にして自分のありようを変えていくような関係だと思つてます。こちらが変わるし、マサさんもこのカフェで働くことによつて、それまでとは全然違つてきたわけじゃないですか。その変容自体をみんながすごいと思つているわけでしょう。そういう相互の自己変容が、希望の地平で起きるんじゃないかと、そんな気がするんですよ。

オリイ　そこは私にも持論がありますね。私は、この年齢にしては友人をたくさん亡くしてきた人間です。うちのカフェで働いてくださった方も、病気が進行したり、臓器移植が間に合わなかったり、いろいろな方がいらっしやいます。お葬式で棺桶の前でずっと座っているとき、いろいろなことを思い返すんです。故人を偲ぶというか。その行為をあとから冷静に振り返ると、故人から何かを受け取ろうとしている、何かを見出そうとしていると思うんです。いなくなってしまった喪失感と悲しみの中で、でもその人がいてくれたおかげで今の自分があって、その正体って何だろう、自分は何を受け取れただろうというのをすごく考えるようにしているんです。

だから私は、余命宣告をされた人とはできたら友達になりたいと思っています。そういう人と友達になるのは怖いという人もいますけど。そういう人から何かを受け取りたいと思ったときに、託されるものがあると思うのです。

中島　託される。

オリイ　ええ。それはおそらくこちら側が見出すものだと思いますが。

Orilime　って、接客の終わりの時間が近づいて、マサが「じゃあ僕そろそろ行きま

す」と言うと、目の光がふっと消えるようになっていゝるんです。これは、今までマサだったものがただの物になってしまふ瞬間を演出しています。私は、O・E・E・Eの本质は、魂が抜ける瞬間にあると思つています。いい接客をして、本当にいい関係が築けると、パイロットが「私そろそろ抜けるので」「じゃあ楽しんでね」と言つて存在がパツと消えた瞬間に、ちよつと間まが生まれるんですよ。その間まが、実はその人のことを一番考へている瞬間だと思ふ。マサからは見えませんけどね。

中島 惚おぼんでいる瞬間に近いんですね。

オリイ それは何も死別だけじゃないかもしれない。インターネットがなかつた時代に、遠くに行つてしまふ友人を見送るときだつてそうかもしれない。

中島 切ない感じですよ。

オリイ そうですね。その切なさとちよつとした孤独の中に、その人の価値が自分の中で最大化するのだと思います。例えば、マサが次の時間に受付のシフトだったりして、帰り際に受付で「あ、さっきは」と言つたら、お客さんはとても喜んでくれます。「また会いましたね」と言つて。ハグする人もいます。私はそれが、その人の価値、存在の

価値を可視化できたということだと思います。

中島 その人が存在していることに深々と出会うということですよ。出会いには当然別れもある。人と人が別れてまた出会うというダイナミズムにもものすごく価値があるわけですよ。

次の世代へ

オリイ 出会いには大きな価値があります。あの人がいてくれたおかげで今の自分がある、というような人生の発見は、出会いにありますよね。これは、もう亡くなってしまった、私の親友でマサの先輩の番田雄太という人の言葉ですが、彼は「寝たきりの僕らの最大のハンディキャップは、人生に出会いと発見がないことだ」と言っていたのです。手足が動かないこと、首から下の感覚がないことではなく、出会いと発見が圧倒的に少ないことだと。私は、そこをテクノロジーで解決したいと思っています。そうすれば、人生が変わっていきけるし、その先に孤独の解消はある。

中島 フランス語で「さよなら」というのはいくつか言い方がありますが、その中に *adieu* (アヂュー) というのがあります。「神 (*Dieu*) のもとへ」「神の方へ」という意味です。別れというのは、人間の次元がどこか外れて、人間を超えた次元に行くことではないかと思うんですよ。キリスト教の神である必要はないんですが、人間とは違う次元が見えてくるというか。再会するというのはその感覚ではないですかね。それを深めていくのは大事なことだと思います。

オリイ *see you* じゃないんですね。

中島 そうです。*adieu* にはいろいろなメッセージがあると思っています。オリイさんのお話を伺いながら、先祖について考えていました。現代社会では、死んだらおしまいとなりがちじゃないですか。それこそ、お葬式もしないような社会になりつつある。死者を冒瀆していると思いますね。われわれは、死んだ人、つまり先祖に対する感覚を決定的に失ってしまったのではないかと思えます。前近代のような祖先祭祀を延々とやれとは思いませんが、死んだ人ともわれわれは関わられるし、関係性とは生きた人間のことだけではないと思いますね。死者との関係性まで含めて初めて関係性の問題は解けると

思います。死者との関係性を変えていけば、当然に生きている人との関係性も変わってくる。

オリイ 昔と今とで、先祖に対する考え方が変わっているのはありますか？

中島 柳田國男の『先祖の話』というのがあります。多摩の方で、「私は先祖になる」というおじいさんに出会ったというんです。1946年の本ですが、その頃には普通に使われていた言葉なんですね。今の人は言いませんよね。私は、これはすごくいい言葉だと思います。

オリイ 先祖になる、いい言葉ですね。好きです。私は子供がいないので、自分が父親になるという感覚が薄いですね。家庭内のポジションがなければ、自分がおじいさんになつていてることを自覚できない気がする。単に、おじいさんになつてきたのを認めたくないだけかもしれません。先祖なんて、それこそ誰も意識していませんよね。でも、そうか。最後の役割というか、キャリアとして先祖というポジションがある。

中島 いいと思うんですね。血縁はなくてもいいと思うんですよ。もともと、江戸時代の日本は血縁なんて関係なかったんです。

オリイ 大名家は、お家だとか、ありそうですけど。

中島 でも、普通の庶民はほとんど養子を取るでしょう。家の概念が違ったんですね。だから、先祖の概念も血縁に縛られていかなかったんです。

オリイ 家紋の下に集合していればそれはもう家族だと？

中島 そうです。先祖は誰にでもなれるんですよ。

オリイ 例えば、私とマサと中島先生と、3人で家紋のようなロゴを用意して、そこにアイデンティティーや信用を貯めていくようなムーブをすると、今の個人主義から脱却することができるかもしれませんね。

中島 本当にそう思います。私は、「私の心」というものは存在しないと思っているんですよね。心は常に「私たちの心」でしかない。今こうしてしゃべっているというのは、心をシェアしているんです。私の心が今ここにあるわけではない。私たちの心を分有しているだけだと思います。

今、信用の問題に触れましたけど、資本主義がなんで良かったかというところ、信用というのをきちんと考えたことに尽きると思います。例えばパンを作る技術がある人が

いるとして、その人のことを誰かが信用して、じゃあお金を貸してパン屋を開いてね、となる。パン屋を開けばみんなが美味しいパンを食べられてパン屋は借りたお金を返せる。こういった信用というのは、資本主義において初めて成立したんですね。それによって社会のありようが変わったんです。

オリイ 1人に信用を置くのは個人事業主だけど、それが2人3人となっていくと、会社になるんですね。

中島 パンを共有する company^(註9)ですね。

オリイ 3人で所有している信頼だからこそ、個人主義にならないわけですね。

中島 そうですね。そういうことがもう一回見直される社会は、資本主義と民主主義の一番のアップデートだと思います。そのフロントにこのカフェなどがあるのではないかと思いますね。

オリイ 私は、今のお話で、家紋って何だろうと思いました。お家とか家紋とか、命より大事なもののために散っていくことは、誉れというか、納得感があると思います。このカフェで言えばミッション。私たちは、孤独を解消するということをミッションに集

(註9) company の語源は、ラテン語の cum (ともに) と panis (パン) から。

まった集団であるといえます。われわれのメンバーは、自分が稼ぎたい、自立したいというのはもちろんありますが、みんな、次の世代のためにどうすれば孤独を解消できるかということ、本気で、人生をかけて考えているわけです。余命が長くない人もいますし、最後にやる仕事はこれかもしれない、という中で研究をしているのです。パイロットはもちろんエンジニアも、「障害を持っている人のために」とか「マサたちを助けよう」ではない。助けるべきは次の世代、いつかの私たちなんです。いつかそうなってしまうのための先をつくろうという、その旗の下に集まっているのです。もちろん個人の権利が侵害されてはいけませんけど、その思いが、力を発揮できている理由なのかなと思います。

障害者雇用でも利益を上げたい

中島 制度についてはどう考えていらっしゃいますか。
オリイ 企業には障害者の法定雇用率がありますよね。法定雇用率を満たすための障害

者雇用になってしまっている場合もあります。本質的なインクルーシブではないけれど、その解決策を誰も知らない。私はそこをどうにかしたいと思っています。分身ロボットのカフェには今メンバーが100人くらいいますが、給料は100%カフェの売上から出して、さらに黒字になっています。

中島 それはすごいですね。

オリイ ぜひこのモデルを広げたいと思っています。私たちは、デンマークのオーフス市というところでもOnTimeの期間限定カフェを実施しました。デンマークの障害者の方13人に働いてもらったところ、13人全員の労働意欲がかなり回復して、そのうち4人が企業への就職を決めました。

私は、ちゃんとお客さまからお金をいただいて、経済を回すというモデルが大切だと思っています。納税者になろうというのを、マサと一緒にずっと考えてきました。稼がなくていい、というのは違うと思います。

中島 最近、資本主義と民主主義というのは相性が悪いのではないかという議論があるんです。資本主義は格差を生んで、民主主義は平等を目指すからだというのが理由です

ね。でも、アダム・スミスの時代の初期資本主義に戻ってみると、どうもそれは違うのではないかと思います。アダム・スミスと言えば「神の見えざる手」が有名ですけど、あれには本来「神の」という言葉は付いていないんですよ。「見えざる手」というのは、神ではなくて、人間の「共感」なんだと思います。アダム・スミスは『道徳感情論』を書いた倫理学の先生でもあります。^(註10) 共感をどう考えるかというのはとても難しいですが、関係性と深く結びついているものだと思います。資本主義の本来のあり方とは、じゃんじゃん強欲に利益を上げればよいというものではなくて、人々の共感に支えられてそれが深まっていき、その中できちんと利益が上がるというような、そういうものなんだと思います。

今、オリイさんがおっしゃったことは、まさに利益をきちんと上げるといふことで、資本主義の本来のあり方を示しているという気もします。そうなった場合には、資本主義と民主主義は折り合いがいい気がするんです。今まで、両者がうまくいっていたのは1960年代、70年代のアメリカで、それ以外はあまりうまくいっていないと言われていたんですけど、21世紀のこれから先に、もう一回両者が結びついていく社会ができる

(註10) イギリスの哲学者・経済学者であるアダム・スミス(1723-1790)は、著書『道徳感情論』の中で、人間が他者への共感を通じて道徳を形成することを論じた。

のではないかと思いました。

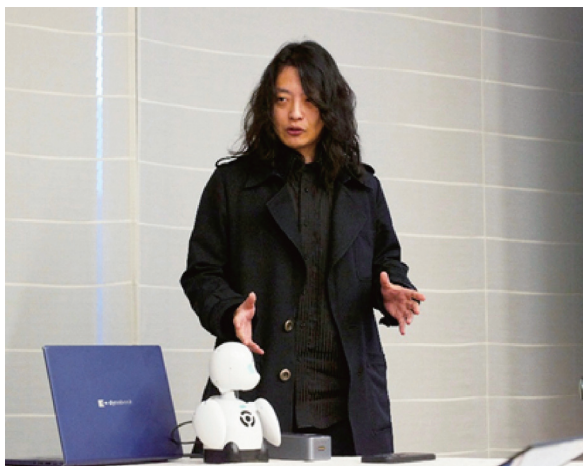
オリイ 私たちは、このカフェで孤独の解消をテーマにしつつ、移動困難な人たちでも稼げるサステナブルな運営を目指しているだけなのですけどね。

中島 でもそれが結果的に、資本主義のアップデートというよりは、オリジナルに戻って今の強欲資本主義を変えていくきっかけにもなるだろうし、民主主義をもっと深めていくきっかけにもなるだろうという印象を強く受けました。

オリイさんの「黒い白衣」

中島 ところで、オリイさんは、いつも同じ黒い服を着ていらっしやるそうですね。ちょっと理由が気になりました。いつ頃から着ていらっしやるんですか？

オリイ 18歳のときから、20年間着続けています。私はこれを「黒い白衣」と呼んでいます。白衣って格好いいじゃないですか。裾が風になびいて。でも、白じゃなくてもいいよなと思って、高専時代に自分でデザインして作りました。ちゃんと風になびくよう



に設計しているんですよ。

中島 自分でデザインされたんですか？

オリイ そうです。いろいろ便利にしています。脇にスリットが入っていて、ボタンを開けなくてもズボンのポケットのスマホが取れるし、袖のところにSUICO入れを作っています。改札をスムーズに通うことができます。

改札の前でSUICOを探すのって愚かじゃないですか？ 私は車いすを押すことが多いんですけど、2人分のSUICOをタッチするときなどに特に便利です。他にも、手袋がついている、パソコンも本も全部入るなど、いろんな工夫があります。私は、ここ20年、基本的に人前ではこれを脱がないと決めてきたんです。

よね。

中島 「夏もですか？

オリイ 「夏もです。もう慣れました。天皇陛下にプレゼンするときは、さすがに脱げるように準備しましたが、結局許されました。最近は、結婚式もお葬式も、全部これです。中島 それはまたすごい。どうしてそう決めたんですか？

オリイ 「これを着ることを、失礼だ、自分とは合わない、と思う人は当然いますよね。私は、この見た目フィルターを通して私のところに来てくれた人と出会いたいと思っています。」

中島 「なるほど。これからの時代、仲間というのがますます重要になってきますよね。あなたは誰かという以上に、あなたは誰と仲間か、どういう仲間があなたを支えているか、これが問われる世の中になりそうです。その仲間を選ぶフィルターになっているんですね。」

オリイ 「私は、可処分所得や可処分時間と同じように、「可処分関係性」というのがあると思っています。」

中島 可処分関係性、それは面白い。

オリイ われわれが、顔と名前が一致して、人格も含めて理解できる、つまりきちんと関係性が持てる人数は150人くらいが限度であるという研究があります。

中島 ダンバー数ですね。

オリイ そうです。生きていくのに、そんなにたくさん関係は必要ない。YouTubeのフォロワーが何十万人、といったような競争の世界もありますが、そうではなく、友達と小さいお店で楽しく話すというような関係で、私たちは十分生きていけるのではないかと思うのです。スナックのママも、常連30人がいれば食べていけますよね。

中島 確かにそうですね。民主主義の話に戻りますが、日本は明治以降、基礎自治体の大合併を繰り返してきたんですよ。私は、それは全く間違いだと思っています。ダンバー数くらいの基礎自治体に戻した方がいい。江戸末期や明治初期の基礎自治体は、小さいところは30人くらいで、それこそ150人程度の基礎自治体がたくさんあったんです。その方が、いろいろな意思決定を親密にできます。それが、民主主義の基礎だと思っ
うんですよ。

オリイ なるほど。さつきオンラインゲームの話が出ましたが、オンラインゲームの居心地がいいのも、そういう意味で人が多くなりすぎないからでしょうね。パーティーやギルドも、100人もいませんし。

中島 そうか、それが何万人ということにはならないわけですね。

オリイ そうですね。ダンバー数から外れると、他人感が出て恐れを抱いたりもしますよね。つい戸締まりをするような、そういう社会になってしまいますね。

中島先生がおっしゃったように、自分の仲間はどんな人か、その150人の中にどういう人が入るかが重要になる時代が来るかもしれないと思います。

中島 そんな気がしますね。フォロワー数ではなく中身が大事。

オリイ この黒い白衣を1万人に1人しか理解してくれなくても、インターネットで1億人にアクセスできれば1万人の友達をつくる余地があります。誰とでも出会える時代の今、誰と会うかじゃなくて、誰と会わないかという生き方も結構大事だと思ってるのです。

オヤジギャグの効用

中島 今、定年後に友達も居場所もないという人々が問題になっていきますよね。出会いはあつたけれども、その出会いをきちんと友達・仲間というものに変換できなかつた。それから、出会わない人にフィルターをかけることもできなかつた。一言でいうと、友達づくりのスキルが低すぎることに。これを変えることが日本社会にとって決定的に重要だと思います。

オライ 私もそう思います。友達づくりは大変ですよ。不登校だった私や障害を持って
いるマサは、まず家から出ることが難しい。出られたとして、人混みに行けば友達がで
きるかというところ、そうでもない。話しかけ、盛り上がったって、連絡先を交換して、もう一
回会おうとアポ取りをして、その先に用事がなくても会ってくれる関係になれば、よう
やく友達かもしれない。これはとんでもないことだと思えます。

中島 えらいことですね。

オライ 小学生のときはどうやって友達をつくっていたんだろうと考えました。学校に行くだけではダメなんですよ。必要な時間である授業の間に、休み時間という不必要な時間が存在していて、その不必要な時間が思い出し昇華されていたはずなんですよ。

Zoomのミーティングだけでは友達になれません。あれは必要な時間を取り出しただけです。 unnecessaryな時間をどのように設計していくかが一つのポイントだと思います。リモートワークが進んで、人と会う必要がなくなりましたよね。今は、学校や職場に生身の体を運ぶという必要の時間もなくなっている。必要の時間の設計も重要かもしれません。

中島 私は今、東大の東洋文化研究所の所長をやっているんですが、所長の大事な役割として、冗談を言って事務の職員を笑わせることがあるんですよ。毎日無駄に事務室に行って、オヤジギャグをぶちかまして、苦笑されるといふのをよくやっています。授業中も、学問の話ではなく無駄話をするようにしています。学問の内容なら本に書いてあるし、勉強したい人はすればいい。必要に迫られた授業はもういいだろうとつくづく思いますね。せっかく生身で会っているんだから、他のことをしまししょう。ばかな話をし

ながら、ふっとアイデアが湧いてくるとか、そっちの方が大事なんじゃないかという気がしていますね。

オリイ もはやサロンなんですね。私も、本当はひとりでもって開発などをしたいタイプなのですが、もう昼の間はオフィス内を練り歩いて雑談するのが私の役割だと思います。みんな、いい人との出会いは欲しているはずなんですよ。でも、よくない出会いは要らないと思っているから、当人同士が話すことはハードルが高い。そこを、強引に共通点を見つけてあげる。おせっかいですよ。そうすると、仮に関係がうまくいかなくても、おせっかいなあいつのせいだ、とできる。

中島 なるほど。

オリイ オヤジギャグに近いかもしれない。自分が的に、共通の敵なり何なりになることによって、二人の立場を一定にさせてあげるような役割は、日本人には結構向いているのではないかと思います。

中島 ある意味、ホスピタリティーの原型みたいなものじゃないですかね。最近そういうおせっかいなおじさんおばさんが減ってきていて、よくないと思いますね。ホスピタ



リティー (hospitality) はホスト／ホステス (host/hostess) とこの言葉から来ていて、これにはラテン語の敵 (hostis) という言葉も入っているんですよね。味方にもなるけれど、敵にもなる。ある種のなんですよ。それをもう少し取り戻した方がいいかもしれない。

オリイ なるほど。昔、オヤジギャグというのは完全にうぬぼれから来ているんだと思っていました。そうじゃなくて、自己犠牲によって場を盛り上げようってことなんですね。自己犠牲精神から来る自爆技 (笑)。中島 そうですよ。気高い精神です (笑)。

昔、英語のベテランの先生から、英語教育の究極の目的は、10分に1回アメリカンジョークを言えるようになることだと言われたことがあります。それで、ア

アメリカの大学で教えていたときに、身に付けたアメリカンジョークを授業で飛ばすようにしました。そうすると、場が和んでくるんですよ。おかげで人気の先生になりました。アメリカにはオフィスアワーというのがありますよね。別に用事がなくてもいいから先生と話そうという時間です。そうすると学生がいっぱい来るんです。ギターを弾き出すやつとか、女の子に振られた話を延々とするやつとか。そんなの私に言ってどうするんだと思いましたが。規定の週2時間では足りなくなって、倍に増やしたら、またじゃんじゃん来るんです。えらいことだなと。

でも、本当は大学ってこういう機能が必要なのかなと思いましたがね。企業もそうだと思いますよ。オフィスアワーがあつて、急にギターを弾いたり、悩み相談をしたり、そういう時間があるだけで全然違ってくるんじゃないですか？ 心理カウンセラーみたいなのを置く企業が多いと思いますけど、あれはまた別だという気がしますね。オヤジギヤグのシャワー、あれを浴びるだけでだいぶ組織は変わりますよ。

オリイ 企業で自分の企画を通すとき、一から全部説明して、会社に重要なんだとロジカルに主張しても意外と通らないことが多くないですか？ 何かつかみをして、要はこ

れくらいだ、という人の企画が通るといふ話があります。聞く側との対人関係の中で、単なるロジックではないものがある気がしますね。

中島 真面目なだけだと話がつまらないんですね。オヤジギャグは身に付けないといけませんよ。マサさんは、ユーモアについて、何かお考えはありますか？

マサ 僕もどちらかというと真面目で……あまりユーモアセンスもないんですけど、今のお話を聞いていて、場を和ませるスキルってすごく大事なんだと腑に落ちました。同い年のヘルパーさんで、お笑いをよく見る方がいるんですけど、よくお笑いの話をしてくれて、そういうスキルがあるんだと思います。

オリイ マサもそろそろ実践のフェーズかな？

マサ どんどんなしょうもないものを言わないといけないんだと思うんですけど、失敗がなかなか怖くて。

中島 この言い方が真面目だよな（笑）。

オリイ 真面目な人ほど孤独になってしまいますよね。そこを解決するテクノロジーができるといいですね。おせっかいA一なり何なり。

終わりに

中島 今日はいろいろと話ができて、楽しい時間でした。

オリイ こちらこそ、哲学の話はなじみがないですが、面白かったです。最後に、よいおせっかいの話が出ましたが、よいおせっかいと言えばスナツクのママですよ。

中島 そうですね。どんな人に対してもいい感じで関われる、あの技。ちゃんと介入や関与ができるんですよ。ただ距離を取るんじゃないくて、ちゃんと入っていつていじれる。

オリイ いじってみたり、叱ってみたり。

中島 巧みなスキルですよ。テクノロジーで迫れたら面白い。

オリイ スナツクをつくりたいと本気で思っています。寝たきりのママがお酒を作ってくれるスナツクを。

中島 それはぜひ人生相談したい。悩みしかないんでね。聞いてもらいたいですよ

(笑)。

マサ では、僕はそろそろ失礼します。

中島 マサさん、本当にありがとうございます。

マサ 今日は本当にありがとうございます。じゃあ魂が抜けますので。ではでは。

中島 ……確かにちよつと間まが生まれますね。

オリイ パツといなくなりますからね。

中島 また会いたくなりますね。今日は本当に、ありがとうございます。

オリイ こちらこそ、ありがとうございます。また今後ともよろしく願います。

中島 よろしく願います。

登壇者略歴紹介 (敬称略、順不同、2025年12月26日現在)

吉藤 健太郎 (吉藤・オリィ)

共同創業者 代表取締役 所長 CVO

高校時代に電動車いすの新機構の発明に関わり、2004年の高校生科学技術チャレンジ (JSEC) で文部科学大臣賞、世界最大の科学コンテスト ISEF にて Grand Award 3rd を受賞。

早稲田大学在学中、自身の不登校の体験をもとに孤独解消を目的とした分身ロボット「OriHime」を開発し、2012年に株式会社オリィ研究所を設立。

OriHime の他、意思伝達装置「OriHime eye+switch」、車いすユーザーのためのバリアフリーマップアプリ「WheelLog!」、寝たきりでも働けるカフェ「分身ロボットカフェ」等のコンセプト及びプロトタイプを開発。自身の体験から「ベッドの上にながら、会いたい人と会い、社会に参加できる未来の実現」を理念に、開発を進めている。グッドデザイン大賞 2021、コンピューター界のオスカーとも言われる Prix Ars Electronica-Golden Nica (2022) 等を受賞。趣味は折り紙。

中島 隆博 (なかじま・たかひろ)

経団連総合政策研究所 研究主幹

東京大学東洋文化研究所 所長

東京大学法学部卒業、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了 (文学修士)。ハーヴァード大学イエンチン研究所客員研究員、パリ第8大学客員教授、東京大学東アジア藝文書院院長などを経て2023年より現職。2024年12月より東京大学出版会理事長も務める。博士 (学術・東京大学)。

近著に『全体主義の克服』(マルクス・ガブリエル共著、集英社新書、2020年)、『中国哲学史—諸子百家から朱子学、現代の新儒家まで』(中公新書、2022年)、『日本の近代思想を読みなおす1哲学』(東京大学出版会、2023年) など。

特別対談

テクノロジーと希望が拓く 理想の未来

2026年6月5日発行

編集 一般社団法人 日本経済団体連合会
経団連総合政策研究所

〒100-8188 東京都千代田区大手町1-3-2

ホームページ <https://www.keidanren.or.jp/pri/>

Keidanren
経団連総合政策研究所